

# Book Review

## デジタル時代に生きる総義歯哲学 Denture Work Philosophy

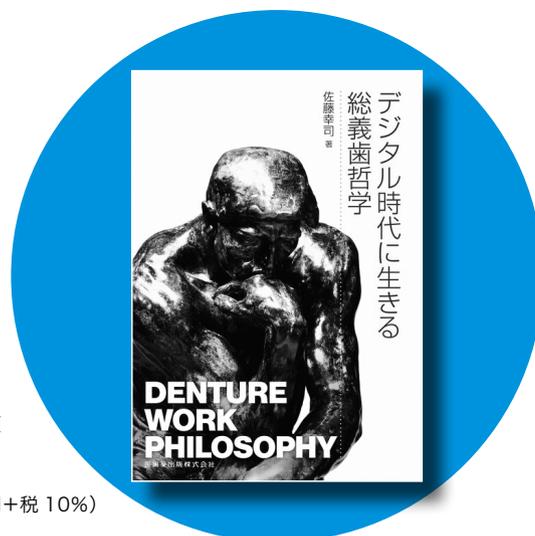
佐藤幸司 著



Reviewer

山崎史晃 Fumiaki Yamazaki  
(富山県・やまざき歯科医院)

A4判, 128頁  
カラー  
定価 9,900円  
(本体 9,000円 + 税 10%)  
医歯薬出版刊



著者・佐藤幸司先生との出会いは、今から15年前にさかのぼる。石膏模型から粘膜の状態やその下に存在する骨の性状を読み取り、さらに骨格や顎関節の状態を総義歯製作に反映させるという考え方は、当時の私に強い衝撃を与えた。とりわけ、それを忠実に再現するために埋没材の調合を自ら行い、わずかな誤差にも妥協せず精度を追求する姿勢は、歯科技工という分野の奥深さと創造性、そして「臨床を支える技術」としての責任を再認識させるものであった。この経験を通じて、歯科技工士との情報共有を積極的に行うようになり、補綴臨床をチームで考える姿勢が自身の中に根付いた。さらに近年では、デジタル技術を活用し、自ら総義歯技工に取り組むようになったことで、従来は高度な熟練を必要とした工程が、一定の再現性をもって誰でも行える可能性を実感している。

本書では、総義歯を単なる咀嚼補助装置としてではなく、栄養摂取、嚥下、発音、さらには心理状態にまで影響を及ぼす「口腔内人工臓器」として捉えている点が特徴的である。そのうえ

で、整体との調和を図った機能の追求だけでなく、簡便でありながら客観的根拠に基づいた効率的な製作システムの必要性が明確に示されている。デジタル技術は、その効率化を担う有力な手段であるが、ソフトウェア上の二次元画面で設計を行う以上、解剖学的・生理学的知識に裏打ちされた「簡便さ」でなければならないという指摘は極めて重要である。

本書が提示する、デジタルデザインに必須となる患者情報は具体的かつ実践的である。正面・側面観の顔貌や口腔内所見は、人工歯選択や配列位置の判断基準となり、歯科的既往歴や患者の性格については、「感性工学」という概念のもとで整理されている。すなわち、解剖学的・生理学的要素に加え、患者の使用感に基づく形態・機能の調和を科学的に分析し、臨床に反映させる姿勢が求められている。また、ランドマークの採り漏らしのない概形印象、周囲組織と調和した精密印象、閉口位咬合圧印象による機能印象、さらにセントリックトレーやゴシックアーチを用いた咬合位の診査など、各

工程において「その顎位は本当に正しいのか」を疑いながら何度も確認する重要性が強調されている。

3Dプリント義歯が保険収載され、デジタル義歯が標準的な治療選択肢となった現在、多くの読者が最初につまずくのは二次元画面上での人工歯配列であろう。咬合平面や人工歯配列位置の決定には、解剖学的ランドマークの正確な理解が不可欠であり、それらをどのように判断し活用するかは、長年培われた匠の知識と経験から学ぶ必要があると感じる。本書で述べられる患者の使用感や形態・機能に対する「感性工学」的アプローチは、3Dプリント試用義歯を患者に持ち帰ってもらい、日常生活での使用感をフィードバックする方法と極めて親和性が高い。デジタルは単なるツールにすぎないが、正しく使いこなせば製作時間を大幅に短縮し、効率的で質の高い総義歯臨床を実現できる。本書は、デジタル義歯の世界を理解し、楽しみながら臨床に活かすために、すべての補綴臨床家にとって必携の一冊である。